漫吟集

十一

十二 十三

内閣文庫
和書 類
二五四四九 號
一三 冊
二〇一 函
二〇 架

内閣文庫
番號 和 25449
冊數 13（8）
函號 201 656

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
x-rite colorchecker
MSCCPPCC0411
MSCCPPPE0411

国立公文書館
National Archives of Japan

書籍館印

漫吟集巻第十一

釋教歌

真言宗の心をよみける

うちひさすとも家の内には住なからそれはまよひにめてもみえさらき

いにしへのあまよりつりしかはひとつ心の月を我よりこそけれ

落ぬると月のひかりしるへしは雲ゐのけしきえぬはおほけり

仏ありし人の月をとらへんかなしくもありけるもひとつこそいかにさへらん

はりのるきしせいけ風よ身をとるさいしの車も何かとよもしん

世のうさにまた蓮きのりしく心をやすくやはらかにまたむ

おもふ三乗さてあなうきを雲もここにはこの山の花をそめくら

はるかなるあめかへり人の世しあとはいやはの道やさらりこえ

淺草文庫
和學講談所

あつかしれはの志らしとはしくれましも志かひとりみとあよ
みとりそのゑしむ柳よそふくよこらめくしみたそめころ好花
こらめくもこころよゐここそしいろおなり乱らハいこそ佳人のくあ
みりりけすこてろの立くよありしやてひりまへ庵おさ月の
なりるれをとてふしのころ悟よおしんをとききよこの流きすつひんと

金剛頂経よ一切義成就菩薩菩
提道場よ坐しく色身三昧し
へうく諸仏こうして求へうわたりく下元
生としく度まへこうもなししとよ
一念清浄は花の真極の親よ佳
たまひし阿法伝恵忠よ聞し

さまふしし胡麻のまかて弾指警
覚して告くのりしく金剛祭
三昧とし薩般若智と成いまう沈坊
せとしおふ仏とよくくはしめつやせされ
し菩薩のくうまかく我是凡夫い
まうい求処としらす彼ハ諸佛慈悲
しく示しまへこう仏より後五相成
身等の次第と授けられしめく
金剛界三摩耶略道廣略しハなりた
まつるなり

法の阿弛ゆうハ多之れハいましにのふ經門かせをはらこさ

そむきなきこゝろのかくれなかりけん月にのそみて月をかくしつゝを経
いむことのありしたゆくしてつまひらハ法の道にも信をすゝめし
人しもなくつきすゝ法の花ハちりすきしとそむかとやゝくらく
法のみちたえなくさしていつしかの海よりもわたしつとも舟人
とり出くかゝみ市つかよるつねやもさけれそうとをつくすほと
法の海あさきに友ゆきし大舟ともなふ人よりこ人ハそこしきれ
法のうみよりやくふかきをなけるせハいつるしまぬ川よわたまはや
おもいし法のこゝろさしの言葉をふかくかよふ霧のかけふ白む
しゝのむかりしやいつくちゝよりかとむ心のうちをもさけ
さけハちりうつれハうけぬしやされんの月をけふらこそえ
法のはなのなかにさきとをさくし法の信なき以限して初にも世を見

いかにかれむかしの人のにてしかれかの仏をそこてしかなし
ありとなこてるとかかくまハうもいのちハ三世を仏へやられ
法の海の花にも川日をくなかにもあらハさいさくつゝたえ
仏のありの法の花のなかん法の海をくしもかくへつもかさねらせハ
ちりとかりんのかけらりし志てハ月の霜ろてとくへとやてん
天て後しと佐りさくらんそてなつむえ心に月てし秘のかちをさ
月も日もきつらぬ光ハみそすのひかなしもかまさらやとハゆく
菩提のつゆやしくうつ川とし人しハおろくせかへさも佐久り
あかりすう心こそ月しなかなれぬはなのまへてけおもん人しとも思ふ
いかゆ月法のぬかりハはしきのまゝ心てふねつゝのせよ世 秘つと
うへかみさ法のしあれいけつのからのあの人のこゝろにこそかゝる

阿耨多羅卅云無上
法 表 彼 百 派

ほのかにハおもひしもまよいきて老の袖こそいまハひとしかりけれ

所義経

てらすらむひかりのみやこハさなからに行ゐての八乃雲井なりけし

みちのくのしのふもちすれ山ひこもいかにくらふるはここへやハせぬ

月となりてそのよハ影をやとしけるも世をそむかすとハみても出こし

此はハみちのおくにかくしおきたりしからかはの世にハこえとは

大かたのひかりもいつこにもかくこそはかりなくらむ月ハ

うき世の人々を仏となさしめんとしてたとへも仏なりけるとは

しらぬはまつほとけもさとりあるなくさとりやさく

心さく月さく月しくらくしこころしられもひとやそちらに仏まかせん

いましみの川と思へハそたのもしきのりの花しいつら人をかへいハ

ゆふやみに玉なきつけもしらぬはあさもしやてらさまほしき

菩提心論衆生愚曚不可強度の心を

以我功徳力如来加持力及以法界

力乃三力の心を

身ハまよふこころハ月としなれやつみをまよへる人のあしもとを思へ

佛乃涅槃し給へるは

ミ川のほとりにていさなへ行ハ月のかつらやハあしね

常にかなしくおもひて御一両の昔おもひなさしとて人の

こりつもしその前もしつらくそのくもりのゆくへなりけん

仏のかけもかくれなきらむ月ハこころせしかたの

いつのよのくもりなくそのかけにかくれおもふかけて西にむかふ月のかな

もろともにおなし月のこころをそむけにけりわれは我悲しき
甚なりのこゝかれしかるけきはれはらりくまにもてはしとなれは
落はせはあくはゆしはなのさきはいまたのうきめくるさん
為よりけることのもとかしはこゝろもけもおもれし雨におもしろきさん
きけるこゝやちりつの別は袖あはれ末の世まへを深く出るき

又

おかなしきれかはいつしぬる法のやのあやしいやかなき

淨佛

あかつきのゆめみえやはのみ仏れ月残せしへむとさん
ままよけりもつのあかれをこえかりさきのくらくはの衣あつるなき
はのあみ神よまつのをはなほかあしもかくけのさ川わかやうおれ
かくかくきよれたけきとのしらかさて佛よありさとまいら

高安のおもよ堂のまへてま東はうくへ歩きよ
守てあそ寸乃やくかなれは菩提樹
ここにおもいてすこしつかはしりく
仰しもはまのゝ下風に音をかし青は苔とさうあらの
わけ介令の則座に住して法は常識
の歌をほしつましめをと露ゆ
安養の淨佛出現しく彈指發覚
しらく告くのたまもしく善男子汝の

所從は一の清浄なりといはれたり薩般
若智にありとも釈尊なりけれは是凡
夫はまこと求菩提のこゝろをこして開示
を語つけまゐらせは諸仏ともにみなはまもりて
鼻端におゐて月輪を観じ奉り中
に唵字を観せよ三世諸仏これ
此観によりて成仏すと観をなさ
せ給ひて成仏をとけいそく此由にて
ましませし是に守護国界主陀
羅尼経にとけりし釈尊なけ観成就
して十二月八日後夜分にいたりて成

佛し給へりと大報恩経等にハ明星
出るといへる刻後夜分なれは明星を
見てさとりいつると観文秘抄にしるし安
諸説なるなり金剛頂経に守護説
の類文ははなはた多し

打とけしなかりせはうき日
あやしきそ人の月此世をてらしあかつきの空に此山のはなれやる

如来蔵性

こほりこまりて出家しけれはたうとかりしかはけりつゝ

最勝王経乃捨身品におもはは

うつのすむ所乃ありしれすゝ衣食もやくたにおほひける

梵網経を講するとき

守なりし法のむしろにしくしつゝゐしきみといひ人は

経は講するまてしはしく放生とそきく

放生れりのまたとるゝ時れはれ衆のかた人の何をおもひけん

弘誓深如海

とけは人のよろこせけあり

応無所住而生其心

もろこしのみちをひかれはもかつくまはむのありてもかろかれ[illegible]

衆生無辺誓願度

いはしはれ何ほせをえてはらしもろこしそすは草も[illegible]

法門無尽誓願学

山は誓何かしつくはいしつ拾はなてふこちと法経ひてしるか

法の舟うらはいかはもさなすのしらすしは世をそくやすきなと

いにしへの御名なかりせはいかにしてかゝる尊き法のみちしるへ
いにしへに法のかれましまさすはかくて衆生をいかてすくはめ
法の御名をこそ月を詠めてやうき雲の世をはなれせん

戒香れゐくろは

梅かゝにまかふみちやすくしかるらむ二ゆかりこちれしへかをるらん

梅か枝折て佛にさゝけゝる

きよくさける法のまへの梅か枝はゝるかにさかへこゝろへしとやは
法をおくる花を佛にたてまつりて
常燈なる三世の佛のたもちまゐはあかさしらねはやみはれん

三寶

なかなかになまかはりのうちにかくれなからしのかくせしつもらん

聲聞

聞ものゝ法乃みかけ人はいましまれ法のあとしかおもひてや姉
花はちりても木のねの薬をそたてぬけし世のものそやさしなし

精進

しはしとゆめの月のゆかりへ行はつゝまことらんとかけくやはさね
あつさたにいとをきはなそれやさためしもそとめハ人のそこいやハせね

一 法隆寺乃佛像を天王寺へうつさるゝ

亀井もやとこゝろひてけの水とみのを川よ千年へてやね
いらぬ家を若の新は草むすびしかれ人のこゝろ

慚愧花衣といふ歌

あはれしみちのこれし綱衣りまく為ぬるゝ余れ（か）のかし

一 聖徳太子乃御哥とそ

ミと川かそ絶てしらかく今ゆりそのなれつゝれ浅くもあるゝ

弘法大師

依仙山ゝろゝ寸乃子の郭公初さもを慈しきや出らん
ありかしれ光をはくやうれてしきしれ知よもりね人
彼風ハねれまるくしほもともむかしさゆやもわともりん
ゝら節山ゝれ信風もうこえゝあこけのむかを人ゝもりけ
みるを妙りけの素ゞいのらみくゝら師の山やしよせまらん
おくりまれゝら師乃おくよいつりをれハらや乃山れ書ハをほし
ゝら師むゝけのるむろ我云のこゝよそらし光もいかりてらさん

大師あゝ秘乃後ゝよとゝよ大日を
ほうまへる中へよ金剛界をも
照ともとも

こゝに此山に大くすの葉も其もとのかたちも象の頭花のつゝみたるに
ほくちはいとみゆハ象頭山とうちあふくハ象の頭のことにまるまるとみへけれはとし
麓のかみは松はいつくもたえしかも谷水のつゝきをいひも及ふまし
この此山のねのめくり雲たちおほひてかつ見えかくれしてやけ世をたゝん
やかて又もあらはれけるはいつたつみ山のおもて雲にかくれつゝ入えかたし
かれ此山おくにみるものをはかまへてすゑまてもしきなりし御まへ
ことにこゝに此松かかれこれ其他ところへそのまことに称へしにそ

讃岐国多度郡にまします金毘羅神社は
貞観元年正月に神階を従五位下と
あらためたまふ三代実録に見え
猶し貞観年中讃岐の弘法大師の師な

りし仕法の大寺の行にはかりすせし
まきらかにみえる見かたしくれハなし
入もあしつゝ氏神にたつとはれまゐ
讃岐執奏しけるなりけれは
さあるいたるもの気の本をもちしからいつきせゐはの雫し

弘法大師讃岐しるしをそいつくしまへ
ことはいまた時としぬ
いせあまねくもかしみよろけのゆゑつゐてもあめつちこそやさやかにうえん
いかしよれかさくりしらねはなるゝは何となりてそはの守人

はるの夜ハあまりし思ふ事を行の身ハかゝるの事もかはらぬなれ

山住まいしらく

うきよからはなれしとてすみける人の月をいかにみて

うらみへて思ひしなから猶もかはらぬ心ばせをしかるへし

不動使者尊

いかにもしいろこそ名をとりの世のかたきかたく心の闇を

秋哉のこゝろしらく

ひかりもなかりし月も世の中ハ人をてらしてもしや いと世

身をとうやく車かくつくかりしとみハむかしの身はいまをてらしやハ

すゑらのてりふかれの月は同しく猶もあまよ出てハ浪たゝよふ

月影よ照らすとなりさハ今こそいそやくまなくいかてらさん

そらなかそて仰はかなき世にまことの仏の道を行し給ふ身ハ仏なる身と

我つもりしかさら此の身はまいさめハ人の猶まかりもなかりしてん

うれえ源信僧都のかたはらのかたりしもいひ

極楽ありしもいふしかるかしいかに所よ

なりゐたり

うきてもの猶しからさはいもとい来世乃やゆめとも去りてみるてん

はるの池よ月出てられハいつしよの川のゆくてもこゝろそあかりけり

はめあいやのかあいそくこゝろしはつ今もしこゝろ身やハつ所かなと

はの音に秋やとかへるうたかたのはかなくありしめくりとそうつゝともむ

いつもの今しからうこえぬみやこなかれはきこゆるとあくとの

あすか川はやくみちせたうこうし川もはやの海にしてまくいくへき

何やんようしはかこうみれむろうしけふ世のやとみれゆとはありとも

世乃中はゆめとしうつくけふあすこそ釈りきことゝ人とうかゝは

もきはれ清瀬りのせわたるやせみはうつゝ舟めて流きさん

月もりもこう人の志かてわたりのゝ雲れ行くみかをいはせん

ひかしきいしかしきことゝもかしきこと見えとも碧みすやとな

白浪乃もんや世川ふこゝろしめ紙せをさくねはわかりかち

あらは浪よこうねかたゝきさくんの浪紙むなあさきとや

大舟よいかしみ紙たゝしはうかれ人のふなちの水はいかくもこそん

世乃中はやは川のなかしこゝみとせふくまかしてなもひしやうつれ

いさとけくはの私とあふしも何乃物よとあらもれもしくや

はの海乃みゆりのいてゆりしうみ多くは川法みのいたおかさん

法乃ゐらそへくなかしいやをやさえむ苦よなうふむまへつもて

こゝろうしのもらのまた月は残人もく

うれやさはつるれとやしみそれなりひかりの久吉の来ぬ月

あなもとの多はあまれ菩薩つる行く人をいひもわかりしとかや

かくてつきはいく川のなかまてみつりなりけれもそてなはの浪かは

長福大やかしいのいさみへゆくさてはいつくはの浪えさらん

むしろを行さ友みの葉のあさからをいはやましとてぬれこふ

をかつれはすむとそひくかれましこ舟はいつくと何いとくらん

いさしらすあすか川のせのかはりつゝよにね無常やかはらさるらん
いさしらすの夜さへ川にさわくなる水ハこゝろのいやまさるらん
いさしらぬあはれとしつのあけほのはなとこゝろやかなしゆきまん
生死のしらへこきしこ死たるしかとしもやひとかたそらきしをそふ
いさしらぬ人の川へそよまよを渡まくらとそみえなれてやすいとしる
いさしらぬのはなさへうきしらのこはりははへあかなりゐもゆく
うきこゝろしむ何にめかつけも風にこゝろあかあかもひく
世の中ハ我ゆかしかのしとすかにあまり何もれのこ人ハなきふ
ちりなりしくみかそへ人のまへりくまゆくこまうき葉おほかるらん
世の中みんな何かしてをもゆすいは人にもめくいつかいつらん
かくつかはせしかのはのあはれやまめかへの路をこしてそえめ

むしのこゑしハ秋はてしますしいしらあしかたそはしらふもなき
みゆきてくやしきの月まて新しあす杉しや人はてもかれやしまちを
つみよりつくんのかすの宿こゝしハあすにての月も新しくしてこそ
あかの世まりかハむかし何ことくやしみても我かしこ花の枝をこそなる
はかせの何えの名をみきたの名をしるまゝにてしまん人をも出てしき
うきことは絶いつく思ふその里なりしね此世のかなきにてそみれ
風ふかはきもちれる花はちるらんとも吉田の山いよつくさかりなる
うし見みし君はしらこてまたしいけはなくらしやまねの月を
そくせしふりしの花のつゆしすいたゝしららやまねの月を
おくれむもやかしくらき君なくとられあかのたましけくねしいさらか
月かはさとの秋のいつもつくいとしらぬ月いまてまし

婦人ことにはの人よりかつましくろくしきそのをもてなしこそ
うらみすてもふうけしことしね人はおもしろしかりせ世をくらしん
春秋もあしかりまそてゆかりくれわはすた世やいつらなるらん
はみ世もまるいかけるにみ方をとりくさいくね人み行なけつさ
乱しやうの六みたらいかしきもうこてありしいてゆくらん
六乃ららめくりもやうりぬをくつろすみくさいとやまさて於りけ
むかし今始のははののしかさに人のしこそいりくそうされ
ららのくいそろけさかしくりやってあもひちもひくらの世花
みちあくみちうれしかくそそとの濱みて下雅ですくの回うく
はみはあそのやかうゆくいうちきり波ありとくし俳かかくつも
めりの花とかりあふみまる所山ゆきてすうみかりうるよけく

はれらかむひやけそくつうるかけくひさしきさ天のはくまよ
はらつきうらつるゆけあらいのあつるうへよむすれはもはは
ならまうら葉まをさうすかん身くなりのまひ同と身と花むらん
とあしくん心の思ひまあ川月の何をくるとる出つくうるとは
花ちりてまたゆけとくらしの川いそしかしいそあるこそつせね
はあれまこりししまね筆てまも行ろ雨しし霧そこうりて
わらん月もかちもとももろなりしらくしきのひしけそらん
こらうけぬ人の色れ月も手なりあうさ夜をやうこゆもらん
さゆるの月まやすらくもの衆をあくねすなるて夢は峨さを
まうゆをたらされ行まあひあともるしをれなまうひやなすのらん
はめ所乃村しさうかすしぬ何ももかつくへしそ之をけみせん

めでたやこゝろの宝は我がりをとこそみがゝば何かもとめん
りあまかくかくしのこゝろつくり川に流してみそれは又永し
ゆうき夜をとつでしかくりしたをたちおもひしゆえ罪をみこれば
さ死の海よそしよふ法の舟よりかれをしつゝとらうとりへさ
うきわるさいちゝしてうてにもりてはみむしてつゝおかりしハちからと
いさしにハぢしてなつさはみてめでこれにむしれはつをてん
いましにの海の風俗はてあるハ何も月みまちとおよさへとれ
そしきふふぞてとれて身もそてそ仏力たのひろはれぬへし
うこさり衆生のまつせすすみハもとほてさうてらてへてそし
いふしにわにさりいてとろ川ちそれしはれてはの海ましとう
松はうるにれハたしまて仏しんのうちるまとしうちも

まよふ身しハ愚痴も煩悩しいだすり地獄ゆうりのゆへに作しはないで
顔へしやみなるゆるく人ハかそりくれそつかよかたへしぬ
むつみ参いつみよこりつきぬ世ハむ死して頃ていりりいて
我つの弥山みやつとしとしゝ川海よいてハかさしさゝれ
てり月のむしと雲ちさやとの気かりハ我よまりせこえりへし
どこ称のうちにしのおかの菩提もしよのハ愛欲まといへい
作つほえしてまほりぬこてわもしなすつましおしとりこあさん
いつもりりしの佛のちしのしいまよりつき九百字よりつらん
いさしゝの海よいつされハなきことしんのかしこみさこそそや
ようりきれかよこゆりかことしをかよしてつろうてし
さなしかく一むらしの悪の報もこすかり成井ふゆきさそにおハ

こ夜ゆかりみしくりしぬまくら猿心よあらハきえしとせこたへれ
ちらくれ月あかし光とおりもとして人の色よてらハ田ぬれもし
人を見てもふハみくらみその中もかくされ世の新しきうかん

三種世間ハ衆生世間器世間正
覚世乃世

すまもしてふもえてしかよころしく人気の程何よりてかん
みかきつくまいあるもしよきかけかとしもを明えば称かふへき
かく紙をくしはのとりしいてきを明人のやとハひりうりけるも
こころくれこころの月れくさ行しあきらへせよはのきりしひ
末大世ハ覚ハ戯能しいしくちて流りかしくりはのさりし火
いさしよのはまかえしうりよくしい人の月れ新とやとせハ
いきしよのかしうたはの暮とかりしはのまよ人かけりしそ
ひらしはのはうかてせハいつりきの月れひとつきあかるとき
いつり世をとこうそかけりしきをみ衣れハ方とつ人ハそ顕る之

利他即自利

こりしいも人のあまりしかくれハ人代やきもれてきうりくそし
をよひる言元のもしうそありてしも人生きりはの衣られ
こゆき姫るこしちの桜ハおそ仏しきと花れく咲てやハさく
春きても何のこ有り常姫るきのみ物の色をしとりける
ちりかせの声も日新もひとりきくはのよハ存りとくたち
うきこのとていふとけかしきこき見ゆるの声ハ姫むい法をなし

あさかの沼かすみの関もそのかみうちかゝりし江のしるし
ろうそくも消えていかゞせむのほしみのうへのあかれん
にうしかゝもの出尻ハ名のるとも立田の川のもみちは
ある人のまゝしけるかしらあらし年よりの
ありしかくしの抄もいたしした禅定にいる
此ともの僧尼しなるをいのはちんとて立
こしらへ入はかゝりけるとあるに
かゝるゝことあとこそ是でもうたかふ文字へや今ハまよひの

不動使者ぞう

いえるは仰しうことさ名ハ扨いふの仏のつかいまてそ
いふしへまやかいし酒の名まとははまあるむや足いとゝまし
いふしはのほとゝきつハ御はゝむらさきせられ御めぬさひ
うれしさ此物にも王子いれ所の寿かる物やとらん妻隆の御
今いかはゝの御まうかへりつるものゝあまてらすとも
人のむかしあれこの川よりかしありあかた
なれるその松やまかくらんとして人わ
うらなせりしけいかなしるく
よとうまねはけなき名のいよいでまよ衣かけいつらん
水戸黄門卿の御なけき大炊頭
なしとよしとえし六月のひかせつまし
なしこまく中納言殿のみうらな

一 旅人ここにこし

ゆく水はたえぬ流井の左川はなほそのかみのけはひならん

板垣宗膽がたはらにありしもいまはあらし

しかへるよろこしくつくりしかく

ちかごろしれひにおもてたてて後ちたなさきのはしはあとさへなく

はま草の中に埋しこそ若しさくかなしやはかなきこと神なるに

まみさ川今さし橋を見結ひしたまさ人かうてこそいはひなるらん

なりさ人のたてまれゆきへしうるらく日よしとよみさせやりけり

新古今の情し人ゆきさけうるれ字はつりけるも神ありや人

さうしくらくみこうしよなくしつかあさうして山あまりしもこひ出よと 加賀かん

うしつうきもあらふしにこゆれ水らくなりしに

予も思ふ旅のはて時なふし川をひそしてなら郷にはしよらうまた

宗膽かここまうけれはしまりて

むさしのの萱たる夜なりし又しうし来れゆきと言ふはれ秋も行を

あはれなるにうきこしまこゆ秋風もかつらしと吹してぬまし

さらし咲ては夜事よりも志よし我とあれこうらをはれけりかけん

なりひとやうえすかれひしあつらのこおれ夜のなまりなき地とに

夜は旅思ひの春よりくるとしや涼しさ身よ人さへぬる人

これつくし如水かこまうけし時 元禄十一年十一月廿五日

花の頃かけてむらしうをまへしかれこれ人は元よと旅まさ

さらく見み山濃の道より流をりし谷よて風よ言うやの何らん

志らしの一 ゆく人こうしあとゆりかくてあるにて元ら八まくへと

こゝろしゐのなれはほのかにちゝみやまくこゆをしも人をいさめなん
めくらうし本やのうちたれのかゝ川にみたらす人ハ何にハてうけり
かいくるれはまこころのあき袖かれてゝたゝのことようつしやみし
衣みに人のしれねはりしたるは
ほしきたりけりとすまふきもなきかゝたちまくのうひとここまへて
こゝる月のまへ人けりしたしけるし秋より
なかれくかの雲まへ
秋風乃吹えすをも人ハなりけしを秋さへこそや花ハかなしきに
時しらぬめ信みよりまたしなる花
ひめりまへ
ほのうちあみゆきても思ハしをたましかきへの人をたちかゝた
かしきれゆうらし此たゝしれかめいきてもかけしかよこゝゆり
中文往生中西信誓にゆらすしくそれこゝの
きしとりつゝたゝせらし
こきいもし再しいたゝくいその信れはこゝに此信よ人をしる信り

邪正一如

よくかりて思称はふかくいはらにさしまちまとさすしとハかのをと

煩悩即菩提

讀誦のうた物よ皆ゆるしせをとてくつりの薬をやいあしも

あるほりもとよ寶篋經かきくなりける

ほとこかみて

えやハ家をかつりりもくらの山田のひきていひてきこえし
世中はのはのこと見ハちりうせをこころみりけるひとをもと　とよ
もの川みちりつかりしてつのまこたるそのみとけるしもうた
せみよまいりまもんつるかりかたてつとみをハ為もありしと
いろつらよるするて月ハつきしあれハ見きくおもはれぬいきしよその川

五月のは巻(志能古/吉市介)同しくはる年指と浦をう

ほうし

そうら川ちくせをと法くをむかしはのさあやくうさしくん
猫うらすみしりくさ文章かくらくはのなをとうてゆきうよ
茂の根ゐもなきの本こうなしいろきほとうるまやうし
東郡の川のりれうかれを仏人の事をほとを法まして仏ゆくへし
薬師山もみつうかれをほ川の川のうろれはの事ちとよ
はのとあつむやいちこみ茶のつよ人いふるとみを文人くいとく
いきしにのきう川のかよちはしあるハ何まにはのもり人を志きの(こかくも)
ミうくたしけるえ見え文こころのうみ而よやいしうらん
ミはくさくミいよこりとう川とうの文しはりほさはのあるまに

なりけりやうまれ今ハゆかりありおもひとて見えけハかもゝいれしはてこそに

むつきつこもりの夕まつりてハ

たとへしりとはうゐくうさきあしねこれなの何ともふらん

なしきしは寿をけふとしつゝそして今しもけれわかともかしく

こゝろまちてハうれしきみし神さらす今ハわかれしたむけつるなる

おまかりなたけやうくえん甑もの節よりのいハしてさうらし

又にごとハつゝのそくれをまうしめりかハさくらうにれは

うかりてむこさもあつりしあもをまいてめぐる声といまんかうこそ

もこさらくとてうをもまうしのたまひしらく一夜あまて繪ありかくら

夜にしてきかうしなせめくてもおもふぞれんの月やてらしん

いふしゆのゆきとつゝておもひしてまたびのふち詠ましまた

祈りハくしてまをたのひしとなかしひしも今ハさきりもかくとさらん

漫吟集巻第十二

哀傷歌

人のちにみなかゝるみれとしもくも
ましゝ我まろりなくはさおしいくよ
ある

こそしめ付しかさる神々も無常まで去りまた河らん
ちゝ多まりぬめしこくへり

ころも川おとの白波を月はけてむかし恋ぞうこえ

人のとしこり五月にちゝこまかりけれは
こしれ月くしに極を皆けるより
そうてはつかしなり

春のころいとけなかりし子はなりしなくて
ろくのかなしく

はかなきまさき子は世にもなき宿にまとふるてもの雀や猫さへん
なにゝこの国にあひしまゝる人あまたゝしか
まもやはしくゝれるのをしらへと
てつかさしなり

世しらぬをおもなきくさのかけあはゝ問ひしらぬもちぬん
流れしもしらぬ春の花を散らすよなくへのか
ゝなるくのくしきつるをひとしけにされ
月のまへに神もかなくなりと秋されあるとい
まくあはてもつらんとしくひとしれ

ござしけるのうえ月九たるころは
くらきにやみりかやへゝくれは
つかなりけれてうみしらくゝいひ
はかはかしくしれて松とゝのおも
ろこゝくれたるかいつくしをとりて
舟みをなかれしんきまふせて八
月みとせしかなかくしはまた
ぶり十一はしなくなかめりて
ゆまくつくりもそめしくえして
いじれこ物て京へわかつてける
そしたゝんまはけゝらつひつゝ

もとこゝろくゝしか二三し
ましゝやたけ本ハおしていつれハ君か賀にかくえしれ
ちま物ゝくひしきひしそ力しこけ何ハ二え太くのはハ
おみまゝしてしくれてなりくゝさしとて三ヶさく人ゝにひやん
なれこゝもつくゝものはえもしなゝしひとゝ神れかてハおやまし
つくえ橘かられらくしはおりなまみかしてよ衛とうりけるか
さくらの咲けれは
けきハ志かれんか大江ゝたてゆる庭の桜さそめくゝてえん
たりそゝ人のはゆく出とたのしむとやしきこゑのかき近るへ
も月のはるとこしゝなりつは人やよ
つれさいはかりてとしゝ

長月とさへのよハひきれだしかれしくらくへき人ハ菊を佛にさ
月ハしりつとそのはしさみせんせめてもみさともの餘り
立田川わすもみ仏あくへのさく
方まりめわりしつきおこせきる
又れとれハ月たゝしきめて
とらハいにけりいせるいさしきへてし
心地観経ニ母在為富ニハあれし
けることしなましうたく
今もさみさ丸を川ハきなりしに君ハつえくおれ𢪸
かしゆえたる丸ハそのこ御ちやさけおりもたさるん
子猶しなひてなけきハりくのおく

しハうつハいれ隔りなりてとこる
なりいふるあいれゆかいへうつひえい
なしさとめてしめる
こゑわあれなりし川よりなしてしやつるぬあらと心をえろく
あさき名のゆ一りしらあ花落りれ春(のと)花被のまよこや
なきうしまをへてなけさハやきりて川瀬るといとしハけえ
秋いろ僧の三川ひしハ今ハ若あ
色しとひい和こやしうへつらは
しらき
方説ハし女人の月と云へも源三位頼政ハ隆よもし

ひとゝなり淳にして志は世のはかなきをしれともこゝろは高ねの花
　又ハなくてしこそ花
ちるも月いせしも人を忘れとも
かのゆ〳〵
月をへて身をも思ひきくのことをかへて流しまゐらす
　秋ふかこゝろ子孫のことしなへて人ぞ
はまゆふなかきもなかき人の子をかたふけたるはさらにやさしくこそ
　松ほちたる人よ
おもしろしみさらしおくことをいへる事風のやさしけし
　こゝにわくま白川の所の名の跡さもなし
なしはしく　松平大和守直矩

白川のせきもこえて此ゆくすゑと世のはしとしてそのとくうちかり
　白河郡有常世郷
せさし下川如水に多まつるしく
　ほせ植磨崎磨疏の城をゆるし松ハ
せし河舗ほの玉村をしりつくし
名にはうしへやとしつひたま
いろもしき花のかよにこひつまくれ
をおもひにかゝるくなまへ物をかし
なりたはへかゝほ子なけの親族の
かしくほのあまへとしはされおくる
うしまきさしとしきへてほかの世

同前

ほのよみつゝゆきかふた川のみなかみもしらすせはしきよをかへて
おなしつきされし月日は山ふかきぬせをへてはなかるるらん
おきふしの中にてふた山のあさきさくらそさかり年に咲やうしゆん
いしきいなたむかしをおもひしなりへるへき
ほかしし作り

春のてほ錦の色をかたの白雲にみつるやとひくさけはけらん
むかしこうしなき人はなき人の家に桜のさけり
とこく

ゆかうてちりのあたる今は桜花ちるあはれそしこゆらん
桜咲しくる人の又折かしかけさきあらう

けるとしさふらひつかはし侍りける
都鳥あるかきに手に持をとりてしこゝに花をよみてやにほふ志のえん
ある人やむかしのつゝくをよみよこせと申し
なひとくたちてよせてあつらへ侍る時廻向
らくましいひおこせ侍る返りて
よつゝけてくつしつかはし侍る
なき世の君の世のあはれゆく人ゆくのうちとおもひさゆらん
安云といふ僧のよしのゝへくとこし
侍りけるに申つかはしてて
住人の名をたつねてへしかし世山のあはれこきゝ人をやとし
年ころよにあまりゆきのかきよりよく佐つまことなん

元禄十二年二月十五日憲意闍
梨身まかりにけるに
たいめもしハ飛しくて前よりしてかきなれぬ人とてなく侍るにおもふん
杜若のさかりなるころにて
かきつくる此世しるしハまた新たまも世をとつゐてかへる人まよふ
むさしの国よりかへりける侍清水いまうら
あふみまらかしけるかうしるよはへ
しらくと秋のはしまかりて人のし
しの秋あらしこゑえられも
なのかるかしこのみ秋風にむしの音ハけさこそかはりき
はるのみこゝろの此世よりそへかさしいはやくもやましたのは

宗信か身まかりける時　草巖道入
二月十九日
あつしくもしけ世とかの梅の花たる色香もちかのうらん
春雨のふるころ梅くらしうちハ春さへ人をまつやし
ゑしくもあかぬなくけしもあれぬ
ときうれかなき
あかき人をさとし神まかりしひるやりし本のともハみまかりて
こひしくハ法をもとめしたまさ人ハ今ハかくてもおもはせ
けふもねたちてやくまて咲ぬ人梅もしてしくそちるまし
あらしこそ花もちりぬとも梅の色香よ袖もしとら
夜明もいとし侍の玉の緒よたえ給は
うれしく我法の伸のえてぬいとり

ぐしなくしほくしとはまゝ多侍らは
ならぬ身のしきの宿に郭もいてしる心あはぬ
玉乃緒たえぬ信女まつかけしるをちやうれしさあらん
師乃力まことにありけるをとりつて妙つる人乃
そらにすみける信作りよ侍
高く此世にちえぬ人をはいとひくもて何さら何とらまあつかれとはことよ
ちからしたる人には多まよひ侍
御心にい事つきん人のけうとてもこの世の有もれいうまゝいけん
言葉語にも何おもしせしなのしをはうるあてで新めかる
此世をいのりしまての割まで侍るとるのもやりせぬ
皆なられいりまん仏ましたぬこしのあひもかけるもやかはらけさある

それ故にもしりしよまよひてもある
何かは後のつらき故そのむくひをみおもひなほ深くおもひけん
出入信士の周忌に
なき人を思ひ出れは月はれしめしありしをもてなしたる
大事のたよりしむなしのさりとて
なしみまうとしくらさを春まよたとりてく
こゝろして
こゝろにて川きえしもちるなれは春をけてかくしなかし
あはれちかはぬ此世にまよひなきたまる人のおもかけにかへり
まよひしも皆消え
世の中は此世の露よやとは月あるくなくなれぬるかなとす

こゝろなき霧立わたる今宵みなとはなれせよは波のしらく浪たちにけり

人のうへゆくへしらぬかたこゝろ

ねかくこゝろしをへたゝりてかくたり

てたのけく春たりしかれい

春風の吹にほひ吹出てゝ花みとりよえてさかりをしらん

そもろ花の木の梅のちりのしをれを桜とてくさ柳やさらん

つれ川につね結つる花ゆかしけせよ如何をあやうき

朱雀路の便ののしもにむかへら行わつたなれせてしつのまん

青舟かはせよつゝみ川きり門しりうれしさらん

わしやされせりまめつる世もく地に数ハりてとなりぬけりまし

行のとりしつまかいし名川霧の声もきゆり物やんかしらん

露かつかつりのかりく野辺のたもとはやしさ流にしけらん

吹風をよりぬ煙をとそくるしとゝく見らん露や去るへたりらん

君のしらきあかりに帰しいとせをとらへ知かりなりいしいさらん

何れか井に此ならぬをうちとらくなかむ哀をしるらん

なみてしあれなるをハ花の川のたらなかき行く浪のさつらしめん

まこりしりつれのつらしをこ川の声よまこるくるやハあらくなれへき

なにさそふ藤つれあたしかつつりに行さへき花ハ新をへてきつらし

わけるつの久のけまこなしらりこてりの声も新とそし行

つり此つしよをこなこりのせたてと名くさこれをよ花の人さたらし

何のさとよりこひしくのみをしくそのて雨とされハ浪のしら信

秋の田にかよひふをあはれの人はせるかくしりなかりとめの世や

妹か目はいつやおもかけ末つゆにとゝめてもかくしまさりてみゆ人は
ものおもふ袖もそゝにぬれてもさるかれたハ露ならくもまにしらぬ
露とのみなりもこそゆかぬもこそうらみもはてしなからましふ
花薄むすふ人ゆゑ秋はしるかたみんしてなみたの露けれとやかなりを
をりかしや袖をてらしはしるの草の葉をなくにかなしきゆふへの露を
雲のまはそれ月しけりきよ袖をそへつらきせし人もわすれなく
夜ひぬ山おろしハひとの末の名もかならぬかすとこそれハおもひの花
鈴虫の声しをしけて秋をもらすにしつ月露の名のそのそうなれや
あさおもはたえもしらぬ人の世に袖のちらしとも人の命をもしつはや
露の名はぬれて袖ぬるしてもとりもをもしけ色の名のうらみなん
むつかしい人もつかぬは袖のうへしもうつりかやちりもしつるやはかなき

か袖の声よりおもしろくもかれしこそをいく人とく見てもあかなく
うき世をもひとつの名川よおもひくのとしをすりはかりのれ
現身川袖よふとくしらせしにこそてゆかれ名の岩するらん
つゝ志そらしあまよりつとあかしくこそゆかりいまいかなる世の中
谷のまゝ袖のことをなよわしく露もひとは川よ流れつゝおもなれ
いとゞしもまなしさかの花なつかしくかしらの名しかこころやはらく
年月ハつゆのひかりくとしあつこゝそれ思ひ嬉も我なとの名
使おもふ人ハ涙をもちて露よ風のやうしくあさの夫和を
袖あかあつ袖その鈴をもしさかるらやつるは我とておもひかへ我世ハ
近風よきりひかりくれ袖の枝はとにもちかへても何かは流れつゝ
花よりも露ハあかつきく露くかりもかへりさとそいふて袖をぬらん

年月とゝもにうつりかはる人の身の程はことのほかにと
かくもいひしかたからはくぬしはあけかたにかくれおはしける世の中
思ふこゝろの内にもおもひいるへしいかにもこゝのおとらやうなき
あはれ深きかたとしの身まかりしより
いにしへをこひしのふにやすく
ことにつけていつはりもとて
ま人をあはれ神にいのりしくもみよはしめてしるしもあらはれにけりと
名利のつねなきことをしる二つ
まことに難き神にしいてやすからぬ心詞もとめかたき様のしる雲
何せん人はやこそ此を川のさゝかにみえてたゆるこれいさゆると

百首の内 此中に述日懐舊

こゝろふかく思ふことはつらく思ひ出るは昔みしそのかみのかなしさ
むかしをおもひてなれしつゝ人のそれ
こゝろなくなかめしはのこれるあとつくく
なけしとおもひてはかなしみ
ねさめのこゝろしみる涙さえいてしらぬ夜をまて

月前懐舊

新しくなるもの月にそみむ花は身をいかにむかしの
人の世よすまはてうらみつらん

こつ川なみたる橋みるにも今こそみすへ帰にしをりひけるや

寄河懐旧

明日香川ふちせは昔にかはるとも昔にかはらぬ昔なかりけり

貞享三年九月のころ九日下向

本院のころよりかくおほしめしけるに

ころも川てふけやしらぬころ月はまさきはしらぬ見えけりしものと

はかなきの世のありさまをせこつつ秋もわかれしと思ひなる

あはれしとられつれしとも思ふもむく

しけるやうにかやうにはもやりとそられける

不知のりて着御はしけてかしこく

あはれされもちとしいはむとしもたか

そしことはかくらんと

なり月の出るよりあへもして

猶よりしいかにはかなしむ

われいまさらに思ふのひとへ川のつ

さはそれいつ人やりこつ

やみれとなかれかなしけれ

いとしれすあいとあつらぬ

袖をとよえといやりつとも

ふりてそいはねとちらかた

みくまいいしめとしけれ

さはこなたへまかりなんといふにかの
あまたありけるひとしりたれは今は
たれかひのともなたしきたまへ一首を
とりてもとしけれは思ひかけてはへれ
いふしかみてくれはりけなこと しよむ
かすつもれることさきなりのうたを
はなしぬ旅の枕にならふ夜あはねぬれ枕におもひけるや
都鳥花にあさくものいろさくにまかなかゆきかへりの都の
あま鳥ふしよはしかりやとてかはりし知らぬ旅とうらて出て
すみた川なかれやそのわかれに知らんとれなかりけるさへして
今はよ備ふとそつくはねとりへをかへるてなさをかさし
ほりよりへもあまつかはちむさかしよりあまりけさあまへかりけらし
かけしかとなかけるありつてさしなきしはなれ舟とふくかえて
隅田川あさくかりゆけきそよつれはしれもくるしもとやそへ
うかさいのとちかくとしかくらとふかけよはのこりひ
いろくれふれやのなかくをさくまてしつまかるひくらし
あれれ世はちきさ隅田川の渡せむひをそはさなかれこさたなかれなれ
なまを知るなにかれかこみなつひ隠かへつゐとひかりさき
うれをせうせうしよりあまりく
はうれそむさしのまとしとよしない
もとむかへりしこへあかりけは
ほしかへはりのかりまあかりく文を

はかなくもとしひとゝせをへし
たゝしものさへその月は夜
のかるはちゝの月まちてあり
それ月日をかはりまいりてもしかき
つけるかいくたひといふをにもさる
をかはしひとつかたにむかひて
かひなるやうのちにかへりぬれ
はこなりなりかはらむつかはしと
ふたゝひあひみしかれ
しきにいまるやうなれも
かあふ

貞享三年六月廿五日　沙門契沖

母の身まかりては人のもとへまかりき
沢にもはかなしみやまいにて
かくのこれむしなく恨みけるも
しりてたなしかけるとかり
まつりしかさらしむつしつらく
したけ末をなしいかに嘆かしく
かなし
むかしこそなけれもひとつのかなしみそかゝる
いくとせしめてふるといもしてやまさかしはつさて
これはせつしうまかるし人のなそ

あはれなりしありさまなれは
もとの身なりけるも又九年同居して
ありし代りくるもむつまじきことをしのはれは
ことわりなるふたりはさらせいたちに付ましつきの哀なるもやらん
このたくし如水のたくしわりぬるとのやすく
艸田忠興はよろしくわこせなる
哀なることすりはしもをふ應なるなるにはましとも忠義を
そし
なかしやしなふりとこそ哀なるこの忠よかさね彼を
人かむかしにあらしたくるをほしく
とかくいつかなとし

なかく今又たのむこゝしのつとめはかなはぬときたてやかれに去らん
大佐の三河のうしろをのみ見そくをむつきぶの住ゆるらん
御小井かあかめし三河の三河のましなるとも喜く平代はしかねかる

漫吟集巻第十二之

羇旅歌

人のこゝろしらしはしらすり
をりしも秋の月に一夜のせん
ありせはあしかりける旅

たの花のやかてちるらむ程をこそしはしまてとは心にまかせを
吹なせ夜くもはらふ旅人の夜寒のしるしの風
なれきし人に都やなつかしとふ夢もとゝめの松かり
人の心しらすなつかしきかはけりと
のかるしらく

ゆきあかり八百萬をと云所にて行かくるといひける所にてよみける

大串にむかしかりのなかにこさるゝ
ゆく河のたえすしてなかれゆくも
帰る浜よる浦のあつまに浅からぬ恋しき人の何をあはれむ
こひしき

むかしおもひけん松かけに別ちの河かはみかけかゝらん
秋の浜あれそめしよりあつまれかへりゆくま
かくしてこそしれゆくへもしらし
ていまはなかれゆくへしらんと
いつしかたちかへるおもひ
あけにちやまの嵐の風の音は袖にたまらしてや帰らん
みつからふるにたちかへる人のかりかねとゝく

是の所をおもひあはれなるをくとも所の松浦けふこそなるか
ごまれつゝしまさくしたる人々
おなじ舟にのせてまいりたるひとびと物ハ神よりありしん[illegible]
妙れこちをゆく人とつげいふ[illegible]
海へ出船をつなげよりも人かなしく[illegible]のこりちを
ものゝあはれをしりけるくちしはつけても
松浦舟をまいらせしきうちハ四つてらきまでかたりえぬ又にかさなりぬる人
いりえのはま住吉にしくへをこそかれけれ
人々かたらひて
さびしくも猶さそふなれ人の[illegible]たひ遠き神やは[illegible]
まゐりたりけるはあまりけるゆへに

しましけるに大かたいよいよゆくみちに
て、杉の所の神に申し
ともんとも彼らはおもひそやとも波をまちんとふわれらは
うきしさ浅は袖かやうにひ家おもひは神のめぐみにそうん
肥前の出へ偕かくしあるよ
鈴このまなかにて出る松浦舟出しけるいきしきうをとはよ
出きくしく住くのこころ徒のあはれつくし
なにはのわりくれさくしとしへつる
もしあひしたるうらあれもく
月のさとき徳もしましたなよ
もくらつりくろくに御かなるし

くふうかし宮の橋あをしさうにおもて嵐とふいやのしん
よみちのはなの山はとゝいりくにはあ
つしさうりつゝなりましに出くる
すしてやしあいし袖る人まく
かつくまりたんしもとうらし
ひのしうゝくゝ住るハしくう
浮雲のワさけなりしくへてはつおしうこあをとれやさかれん
そしうこゝしくりまみくるへ
まりまりてひつらんしとと間ゝたて
あるらんしゝしくはりもしまう
あるら雲のならぬゆしゝとちとし川新しおい今のつくらん

秋のはひさしさらのかりかうらくかな
おもくゆかりたんしいかつ
白川のあをぬ山わうさいさし出しくなりまハの秋とかけしこすつな
ワれのころへとしのは　恋
しお衣うへ今のみかれまうなはちるてそあかれ何をもするか
別涙のきくわかしはよくる妙れしもたゝとれ柳もいとそてうしうき
うれくしまりワれくゝのやあかつ月日ととゝまれかくしそ
しい衣ゝわのこゝよしもきしお杯しワつゝとれはれとの雲
あふ昨し宵くワつし閑のあまよせのまとりをむへて辛さ
叶ゝはしきこゝわいはへかしいとかむしうく袖とつしさうい衣かれ
ワれちハ嵩ふ鳳よなくつハ極ハもりの衣やへ今しハかへさん

かくてくだりの後はいつくしはしらの衣をしたちまかりける
さる程にいつかの末つかたにあふ坂山にさしかかりて
ふるしへりしらぬ院をうけのさし障子ひとつ七首よ
そもそも河宮の枕に都をもの坊りゆるへとあくまで移ん
都ゆきゆきくいかにもいふかしたまはば秋はあまさうらうよ
むかしへくうは後の世くまん
うらうらし程に字を書うく
名のこして書のまうけゆるを
今は八年のこのほどなゆくは
つゐにしたためられて
くれうへゆく書をかゝらせて立帰りたまふきしや読みほし

もとの都へ下る人の文の中に
長門の浦より浪の奥に舟をかけ
てたつせうつしもかへいさうつる
かしこまりし故をかぎり候うとかきて
文へつかはされけり
嵯峨の小倉山荘の障子をおしはなれ色紙にかきつつ
いにしへより今の世までの歌人の名ある歌を
書へたまはりつる一首宛百首
の歌をえらんとせし中に
小倉山荘と中の宮しし別荘の障子に
くりよみまゐらせてしるしたとなりし

やらるゝ

佗やゆくかへしこゆの山にこえてゆくへはいかならんとさきへはまくに

いろかへぬまつの山をすきてゆくこともや

かくれ村

こえゆけはなほやまなしさとしろきのきに入れなかり松

旅のそらにはさこそありぬらむ宿となるらむのはまかへの月

羈中山

おもひきや昔ものかたりは風やいふさとことてたのしかりけるのこし

佐夜すきてもしはしみのゆつ松のかくれ

かくれぬ川の浪かけくるかのあはれにはたまもなき思ひあかさまるみよ

さらしなくそ

風にゆく雲にしるしあらめやいのちなくあはれにゆくもしられけん

出てくるし里をもいかにならんかへるしもいへはかなしやいかにせは

出てそおもしろの嶋のうらしかくこそいつまの雲とけてこゆらん

いつましうしてをとひよふかはゆくらのあらくおもひはしもそこらう

佗うつよゆくしくえしふる里とやへの雲井にへたてこそあらり

佗なれし里といひしへのふるさとはあはれつゆしとの声てきあらん

あさちふもいとひし宿といつしれこ何やかなしさこそ佗のふすらん

かゝらあはれもあはれとしく今こゝ新さうえしなのゆてみ松村さ

帰りきてはかなく絶し都の雲しうつりて冬の雨にぬれしゆく

いとかくもいかなる宿の露ちりをむすひのり秋はつかりそめにける

旅人はなにをかくの枝をこうすゝるの仮りならし旅としうつりそ

執するなれはしへてにかりゆくもなかりしこそまよへ我はうき人なれ
うひねとの宿の灯わつきて旅ハいさんのやとをたのまれは
心ある人のひと夜の宿をかりてしゆるしあるも見えすさて
一夜のやとりにあるへきこゝろ里ハなすこてちしても別ことあらん
旅ゆくにみやこへの道をさすに嬉しさとて哀知りしそ別をおしまれ
清くうらむならのいをきみにおもひかさなくゆめの風うちハつゆの如くまよひ
旅とくに川をこへてき草むすふまかれのゆめつまるひ旅ねそをしも
浦のみち濱浦のまさきに嬉しきつみけり我さへをもかハかへまよひ
草枕ゆめちのさそし衣かへはかひなきむす旅寝ともしそ
わかれちにも月をともちかきなきめせハ我をそるゝめへやとなん
なのもへきるれまるへしも旅とし涙のしほそひつ草むすふらん

草枕ゆめへしくにかりねまくハ旅そしにかしはきならそ
あるしらひ草の枕ハ雲をかけてひとの衣もおもといや八重の
くまぬるしき涙かハ夜をかしつきみにしいや旅なんし初冬
宮木野の露をけ衣おりしけ衣の下風もえやハ吹けさを
清の月さやし雲井の山とにあひやとりさそ旅ねとは
草とうけいうまこそよまんけのそらの露きえもとも月中山
草枕ゆめのうちみく月されハ月とかうねむうたとなりし
袖のうちをもろしもまくらをとうつゝにはさむ旅ね旅寝の枕ハ
名をとけぬ我しも今や見てもらん名ある里へのかよひ来て
うひ枕草あらやいまたゆめの日ハうつゝをかくはするかなのわかとや せん
旅ねしてハ玉のうてなをいきもしらなれし宿にかりねをもする

こゝまてハよみやゆくもすゝしうち人りさこえてなしハいつくとかうし
雲にこえしかうしてかりかうてもゝらをとらよそしへをとこえよふ
いふいへにちへとゝ山ハかとをとへいろのさるをしかさりきもかく
ゆきしして雲かりたらのいろへ山のふ行くこゑし秋よつけもや
ミ行よみ八への日もこうくへまくいゆましいなしこゝとつやや
ふりやとくといくもやとやもよつそくもゆくつもねるゝし八への日も雲
谷ことよりのけふち末とへハをとしえしてとよハさらいゆくれ
岩都乃ゆくへ残とくして久清日さとやかしのまの日雲
山ハつ氏ことゝへとしめく九とへハ秋りさしほまふん
山ふよしあり(?)ハ杉のくのまよりし雲姫いかても花多するん
衣此門雲行残今もふもいつわ山のこ行の松なはゆくくれ

ゆくぬらよくほとしきつ行ちしちのうえくらふよれくこゆらん
いつ行ふもいらちのこけもゆかははゆく末うしむ草めし白雲
まよそれ草ゆくしくつまやとちへつもり秋やいくとも今ハ若に
まい衣あしぬ月なよら行の雲は人への宿めくらそかさなりは
八十瀬川より秋をとらりこくいつのちよ月をとこゆらん
川られハうき草しりくしみをとゆけもゆゑほたつれして旅をかなしき
夜半ハつてい衣つらふくふり行くゆくやたもりも川らん
うし衣うをしとし東よつけやらハ風のつしや袖よかよらん
下雲よふつい残さつつふつしくさやめりをなこし
宿のよう宿行のまつ侘ふとみつゆく秋さくてしとふハ峠行か
年月をみいつかし柳いつかりしたか行つしはくり秋とさふらん

婦のちぎりの末とし今ハうらみつゝ待わびぬとりわきて風よ
うらみ人の間よかりしハ花の上の風にちる露や袖にしつくらん
夕日さして木の下宿もなくてハ秋をふるものをむかへてまたうらみ
うき秋かぜ往ハしもとくとやおもふらんの庭のあら雲
うらみやみのうらまてハたなくゆかりのうらみしるゝかをやそ見
あハれちやなゆきかゝりの雨ふりて出づるしらぬまゝ我ハきえなから
まよひて松の風にいさしろの地へのうらむ程の身に終て
雲より松風よ花ハちうらみ人の形をなむけさいせの浜荻
竹の葉のいかくれつれつき名みえしてぬましくこゆるさよの中山
うらみなりしくさうり八もしの雨のまた袖をこひうけるや
あけがたしぬしの形見の露のおもかげやかなしさや雲のあいだの月の

草枕独り夕霧ひとりも涙そ袖にしくつらしのきの
婦のちぎりも露のいのちハをしからねさすらふとも蜘の
うつせ松の露しのぶとは夢の枕月をくるのむしのねの
さしかゝるうつゝのうちよりふるさとのゆきにあふ人ハなきかれは
思ひゆきをハつらくし露のあとにまたかゝり袖のいちとこの山のこえ
ほとゝぎすなくよりもちらしのことにうつゝのしらつまハかハりて宿の下ふれ
あハれちからてやハらかくふしの袖もなれのかたにれ山しらゆかん
うつりかハらぬハ見えずなくゆめちにくやかなしいかとさん
もろしちぎりや世をよそにもいかに風をこしけしき花まくら
ほとめぐりあふこそこゆる心をけさの吹すさびそこそ山風
夜すがらすまの浦の秋たけて夕風まさにこゝ吹つけしや

こひ衣手をとこそはこそかくへそかゝる白川の関
旅ころもいつれゆくつやこゝろもと秋まてにそとしらぬ関
こえぬとて都はつきしなりけり音にきこえすしらぬの関
白川の関吹こゆる秋風にほかならて見えそくれしつき
紅葉を白川ましこゝろあるあるもこそしとめしやとおもし
よそにしまもめかしまくの紅葉こそや都よふくをいはまし
おもひけも今はいかにかし川とさらふりみは霜枯のまのみやりけり
みつはしめ新潟のまの三の名山名やかるし名もかゝりけん
かきらかうくさくしもさくりける紅葉の三の人は紅葉まうしけり
物かさしの人のかゝるとわよさうくうれしとはよなうい衣手
おもふくのみとこゆるはゝる後の日しつましてはるくるになれ

稽翁云落星馬　保之五歳　乃宗方

今井自閑か春るけしく下帰は
芭蕉は花のむかしあかそむかりし後はかりけるくかへまことにこゝろ白居
なすかしし人こそはひさしくおもはく
京へ帰りて
難波かしこえてや行めの名所しをつゝらしてまに飛のなかかゝる

秋旅

我もあくこゝろやまされはけふいとゝ露けきはうそ滴るなり
旅つゝ川まて旅なれもまして見れはあれ都の空も今やさつきしく
みつの帰しとこいのつき秋と秋風ふくこえてこころしかりけりや乃せき

羇中暁風

ふるさとはゆふつけ鳥もなきかへぬ旅ねのゆめの風の袖かへるまて

旅泊

しほ路をわたる人や物思ふらむやまとしまねはよそに見えつゝ
秋乃露をはきもおきわかれし草またゆひの浦のとま屋の袖
いさり火のあかしのかたきのかた枕まくらもしられえやいさよひ
舟よせてそこにとまりし宿のはしつまもあはれとさをさす浦なこ
しほ路はるかに行くの泊りの床はまくらにむすふしも夢の里
あま小川流しきて袖の袖しかわかぬやみつのあまのとまやあるらん

ひとりかもうらみし来とあかしいさり火ちかき秋の旅ね
旅のまくら枕のしたにくる千鳥の啼声やいさし枕そうきよせ

旅乃前の冬中に

追風のあまてらす浦にかけはゆきてふる雨にぬるゝまつかせ
かへらきこしあかしきこえしゆかしき岸風にあかそへふるく
よろこひのかたちこそとのこその行えりの日数なりけれ

また月にふるさとしも人のこしおこそ語せし
ありし

つゆ涙のみなてもぬれてまちいくつあふ宿をしつけき
こゝろもまた旅に出て人をおもひやりつゝ

こつゝにはあふよしもなし夢路にもいかにかたらんと思へは
きけはこゝろもなしの世へかへり
なる人のしつきまて帰りまうく
こんといひけるかりしくやしひの
はふしけはつなくやしつかもし
けるか

むかし衣をよそふ人ありける女房をもつて申まうてし
かりそめにすさいけるの哥をかりえて申しつかへぬる
わしきにたかきくおもかけはあつしよけれ人へひ人御かへし
はの前しこれもしけつけ
むかしきにのまいかりけるかくさくは

ハなくなしこゝはなくはあはなし
宗成といふ僧の肥前の国へ帰り
けるかりしく
あしひきのほかのはなをたてまつる
なまたちけりの生つの松原あかちハきこえも風のたよりに
まれらるかくこの袂とかけましもかしこりてし

国立公文書館
National Archives of Japan